

昨今、医師の世界では女性に対する試験の差別や、医師の過酷な働き方が浮き彫りとなりました。そこで、子育てと仕事の両立を実践してこられた柴田佐和子先生を訪ね、お話を伺いました。

一 子育てと仕事の両立で苦労されたのでは？

子育てをしながら勤務医時代を送っていました。小児科医が2、3人しかいない病院に、下の立場で働いていた期間が長かったので、月の3分の2近くが自分のオンコール当番で、勤務先によっては産科があって新生児も多く生まれたので、夜中の緊急帝王切開など時間を問わずに呼ばれることがありました。脳外科医の夫も当直だったり、お互い夜間に呼ばれたこともあって、子どもを見てくれる人がいないと大変だったこともあります。子どもを連れてきたまま病棟に駆けつけたこともありました。子どもが水疱瘡やインフルエンザに罹ると、当時は病児保育がなかったので自分や夫の両親に預けたりしていました。保育所と親の協力がなければ、フルタイムの勤務医を続けるのは厳しかったかもしれません。

一 開業医になって変化はありましたか？

当直や夜中に呼ばれることがなくなったのは大きいですね。でも、逆に今は一人で診ているので、患者さんがたくさん来ると時間に追われたり、なにより自分が病気で倒れられない切迫感があります。

一 今の医療業界は女性医師にとって働きやすい環境でしょうか？

今は育休も取りやすくなっているようですし、保育所なども整備され、病児保育を行っている所も増え、昔よりは働きやすくなっているのではないのでしょうか？産休や育休は、少なれば産休だけの3ヵ月前後、育休を取っても多くの人は1年位で復帰しているかと思います。そのあとの医者人生って、今にして思うと長いと感じるので、長いスパンで見れば1、2年のお休みは取り返しがつきますし、というか、復帰すれば全然働けますよ。

数年前に茨城小児科学会で「学会開催時に託児をしましょう」という提案をしてアンケートを取ったとき、女性ばかり返事がくるのかなと思っていたら男性医師からも返事がきて、「普段は奥さんにばかり子どもを見てもらっているから日曜の学会で託児があれば利用したい」という回答もありました。また、知り合いの開業している女医さんが応援の医師を募集したところ、「奥さんがフルで働いて僕はパートでやりたい」という人が応募してきた、という話も聞きました。

クリニックでも最近では、「保育所で熱が出たので呼ばれた」とお父さんが子どもを連れてくるのが珍しくありません。社会的にも男性も以前よりは仕事を抜けやすくなってきているのかなと、女性が子育ての中心というのは少しずつ変わりつつあるのかなと思います。

一 普段心がけていることや取り組んでいることについて教えてください。

まずは医者なので、しっかり診断をつけて治療に結び付けることが一番大切なこと。そして、わかりやすく説明することを心がけています。

取り組みとしては、以前、外来小児科学会に行った時にいろんな医院が院内報を作って掲示してあり、これならできかなと思って始めたのが「しばたキッズニュース」です。診療だけでは伝えきれないこともあったりするので、何かメッセージを届けたいと思って始めました。2012年から書き続け、今月で100号になります。

この地区で小児科医として働いて、病院時代を含めるともう25年以上になり、昔病院にいた頃の患者さんが今度は親になって来てくれたりと、長い繋がりがあります。スタッフもほとんどが開業以来のスタッフなので、患者さんも顔なじみで、安心してかかってくれているのかなと思います。保母の資格を持っているスタッフが、院内にいろいろな壁面画を作ってくれ、子ども達は壁に



柴田佐和子先生 略歴
 1988年 筑波大学医学専門学群卒業。筑波大学附属病院小児科レジデントとして大学病院や県内各地の病院で研修。
 1994年 総合守谷第一病院勤務。その傍ら大学の病理学教室に研究生として在籍。
 2007年 しばたキッズクリニック開業。

つけたり外したりして遊んでいます。ここには優秀なスタッフがいるので助けられています。

一 若い医師へメッセージをお願いします。

やりたいときにやりたいことをやったほうがいいと思います。医者の仕事はある程度の時期、必死でやらないと身につかないこともあるので、熱中したいことがある時は、臨床でも研究でも一生懸命やったほうがいいと思います。

出産の時だけはやれることは少し限られますが、そこがクリアできれば医者というのは基本的に男女の差別なく働ける仕事だと思っています。私自身は「女性だから不利」と思ったことはありません。

今の日本はまだ女性家庭を守るという意識が根強く残っているので、「女性医師支援」という名目でいろいろな施策が行われていますが、男女ともに家事や育児をお互いに助け合っていければ、「女性医師支援」という視点だけでなく、違う見方や考え方ができるのではないかと思います。これからは、多様な家族形態があつていいし、女性医師に限らず、医師全体が働きやすい環境が整うことが大切ではないでしょうか。

一 家事や育児をお互い支えあえれば、子どもにとっても良い環境になることと思います。これからも子どもや親の安心できるクリニックとして、先生のご活躍を期待しています。



待合室のキャラクターはスタッフの手作り



8年以上継続している「しばたキッズニュース」